『アジア教育史研究』第二十三号抜刷
二〇一四年三月発行

# 日清貿易研究所における学生生活

## ―向野堅一の兄たちの書簡を手掛かりに―

向野康江

# 日清貿易研究所における学生生活

## ―向野堅一の兄たちの書簡を手掛かりに―

向野康江

### はじめに

荒尾精の創立した日清貿易研究所に触れる論は多い(1)。しかしながら、日清貿易研究所における学生生活について具体的に論じたものは少ない。史料としては、福岡市立博物館所蔵の『高橋正二日誌 第二』(以下、高橋日誌とする)や大里浩秋の公開している『宗方小太郎日記』(以下、宗方日記とする)等によってある程度把握できる。筆者は向野堅一研究の過程で、向野堅一と兄たちとの間で交わされた書簡の存在を確認した。拙論では、向野堅一という人物に焦点をあてて、日清貿易研究所における学生たちの様子や学生を支える父や兄たちの様子の一端を浮き彫りにする。高橋日誌、宗方日記から向野堅一の様子を抽出し、義弟・廣瀬貞治による『天外放人 渡清日誌』(以下、渡清日誌とする)等を補助史料としながら、向野堅一記念館所蔵の日清貿易研究所に関する資料を用いて検討を加える。父や兄たちは、向野堅一の日清貿易研究所における学びに対して何を期待し、どのような支援をしたのだろうか。期待と援助を受けつつ、向野堅一の学生生活はどのように展開したのだろうか。

### 一、向野堅一の人となりと渡清まで

向野堅一について少し紹介しておこう。講談社の絵本第三十三巻『西郷隆盛』(大日本雄辯会講談社、一九四〇年〈昭和十五〉)所収「つよくやさしい日本人」(文・山中峰太郎、絵・富田千秋)は、理想的な日本人の一つの姿として向野堅一を描いている。堅一は、一八六八年(明治元)九月四日(戸籍では明治)に、筑前国(福岡県)鞍手郡新入村(直方市新入)で、豪農・向野彌作の四男として誕生した。新入上等小学(自筆履歴書では新入高等小学校)、秦塾(自筆履歴書では明善義塾)、勉焉学舎、中学・修猷館を経て、上海の日清貿易研究所へ入学、一八九三年(明治二十六)に第一期生として卒業した。その後、日清

戦争の特別任務において金州半島の偵察に従事、ただ一人生還を果たして戦況を有利に導き、後に満州財界を指導した。一八九六年（明治二十九）、北京に筑紫洋行（筑紫弁館）を開いて日本公使館の用達業を営んだが、義和団事件で災禍にあい、北京の家財を失った。日露戦争では彼が開拓した遼西地域の輸送路が大いに功を奏し、兵站部を担当した。その後、奉天に移って一九〇九年（明治三十二）に茂林洋行を設立した。石炭販売・ガラス製造・貸家業・化学工場を営み、奉天実業界での地歩を築いた。一九一七年（大正六）から一九二二年（大正十一）まで奉天商業会議所副会頭を務めた。その他、正隆銀行、瀋陽建物株式会社、奉天化学工業株式会社、満州市場株式会社などの取締役を歴任した。満州事変が起こることを知った向野堅一は、その対策のために東京へ赴き、脳溢血で永眠する。一九三一年（昭和六）九月十七日、満州事変勃発の前日であった。向野堅一の足跡をたどれば近代日本の大陸商業に関する動向が明快である。『奉天経済三十年史』や『東亜先覚志士記伝』などに「君を以て先駆と為す」、「君を以て嚆矢と為す」と著されているように、財界人としては満州経済開拓の先駆者であったというのが、太平洋戦争前の評価である。書画、漢詩を嗜み、号を寒林子徳と称した。

### （一）受験に至る経緯

荒尾精による日清貿易商会案と付属の研究所計画は、黒田清隆首相以下、松方正義蔵相、岩村通俊農商務相らの賛同を得たので、京橋木挽町に仮事務所を開設して研究所入所者募集の活動を開始し、幹部らは約一ヵ年にわたり全国を遊説して約三百名の応募者を集め、そのうちから頭脳優秀、身体強健な青年百五十名を選抜することができた(2)。うち公費生は石川・福岡両県の県・郡費生十余名で、他はすべて私費生であった。合格者名簿、卒業者名簿は存在するものの公開されていない。

第一回入学生の募集が一八八九年（明治二十二）六月から東京芝区明船町十九番地の日清貿易研究所事務室の名で行われ、一八八九年（明治二十二）十二月、福岡の勝立寺（福岡市中央区天神四丁目）で六百人以上を集めて荒尾精による演説が行われた。福岡における日清貿易研究所の志願者募集活動と志願者の動向を、江島茂逸『荒尾精氏日清貿易談―博多青年須読』（一九〇九年）は記している。荒尾の演説当時、博多商工会書記として商業会議所設立運動を推進していた江島は、自ら日清貿易研究所の生徒募集に奔走した。この荒尾の演説を向野堅一は聴いたのである。読売新聞一八九五年（明治二十八）一月十日朝刊二面に「通譯官向野堅一氏」という記事がある(3)。それには、向野堅一が日清貿易研究所に入学するまでのことが記されている。記事によれば、堅一は、新入秦塾（自筆履歴書では明善義塾）で泰巖に学び、経書・歴史を修め、一八八五年（明治十八）福岡に出て、普通学を修めた後、中学修猷館に入学した。あと一年で卒業しようという時点で病気になって退学してしまった。その後、荒尾精が日清貿易研究所を清国上海に設立する計画をたて各地を巡回、福岡に来て有志を集めて演説しているのに出会った。堅一は、その演説内容に感動して受験する決意をした。「日本の富国強兵は後来商業の発達に在りと 此に於て大いに日清貿易の振はざると慨歎し此期に乗じ渡清以て邦家の為に盡くす所あらんとし直ちに願書と出して去る」とあるので、演説を聴いてすぐさま願書を出して直方に帰った。演説(4)を聴いた一青年・向野堅一は、商業がこれからの日本を強くする、豊かにするのだと、荒尾の言葉を聞いて納得している。このころ、不本意な条約改正阻止のために、大隈重信に爆弾を投げつけ自刃した玄洋社員・来島恒喜の福岡での葬儀が十一月一日に行われている。その一ヶ月後に荒尾が演説にやって来たのである。

商業で戦うことを決意した堅一青年はその場で願書と提出したが、入学試験の期日が近づいても病気は治癒しなかった。最初、入試日は演説日から五ヵ月後の一八九〇年（明治二十三）一月頃を予定していたと推定できる。五ヵ月経っても治癒しなかったところを、試験が二ヵ月延期になった。堅一は悦び、この期を逃すまいとばかり治療に専念した。同年六月、病気は完全に治癒したわけではなかったが、一応、歩くことができるようになったので、上京して受験した。合格はしたものの病み上がりで壮健ではない。十数日後には帰郷して療養しながら渡清する日を待った。

### （二）廣瀬貞治の渡清―向野堅一未確認の事情を補うために―

向野堅一は、出航に間に合うように九月一日に直方を出発して神戸に向かう。しかし向野家史料（向野書簡、向野コレクション、向野文庫等の総称）には、渡清の様子を記した堅一の日記等を見出せない。そこで他の入学生の渡清の足跡を検討し、比較しながら考察したい。

日清貿易研究所第一期入学生・廣瀬貞治の渡清日誌は「渡清トアルモ渡清前ノ京都大阪遊記ナリ 正雄」と鉛筆で表紙に記されているとおり、貞治とその親族・廣瀬寅太郎の神戸に至るまでの旅行記である(5)。日誌によれば、七月に東京で試験が行われ、九月九日に上海に到着したものの、大阪に滞在しているときに足に腫物ができて微痛がしていた。それが上海到着日から激痛に変わり、熱が出て校内病室に療養することとなった。病気の数日間、学校行事にも参加できず、

俗事に関与せず珍事も耳にすることはなかった。九月二十日に盛大なる開校式を挙行されることになったので、それまでのことを記しておこうという意図であった。

廣瀬貞治は知り合いに見送られて、東京を七月二十九日午后に列車で出発した。この日、細雨霧のかかる天候であった。同行した寅太郎と話していても愁情を圧抑することはできなかった。東海道各駅を過ぎて箱根山は夜中に経過し、京都に到着した。知人・浅井何某氏に世話になりながら滞在した。貞治の父親・廣瀬七三郎（南窓）は、書留で渡清旅費二十円を送金している。現在の六十万～百万円に相当する送金であり、「家父の厚意感涕衣を湿したりき」と感謝の念を記している。渡清日誌によると、九月三日が一同神戸へ集合すべき日であった。九月二日に大坂（大阪）の停車場から神戸に向かう。集合場所の神戸の学生合宿所の一つは、「神戸北狭通七丁目小林ウメ方」で、廣瀬貞治はそこに宿している。集合した学生たちとその地の見学をしたりしている。九月四日に郵船・横浜丸で上海に向かう。午后八時に一同、西村（忠四郎）宿前に整列し、小汽船で横浜丸に乗り移った。貞治と寅太郎は第二組（班）に属し、小山秋作幹事の指揮を受けることになった。

廣瀬貞治の渡清から向野堅一の渡清を見ると、堅一は九月三日が神戸集合日だったので、九月一日に直方を出発し、京都、大阪、神戸を遊きょうすることも、集合地における知人・親族と交流することもなく、たった一人で直方から神戸集合場所へ直行したと推測される。堅一は一班に属し、宗方小太郎幹事の指揮をうけることになった。九月九日に上海に到着し、学校行事、九月二十日の開校式に参加した。第一組四十一名、第二組四十二名、第三組三十九名の合計百二十二名の第一学期の授業は九月二十一日より始まった。

## 二、日清貿易研究所への入所と学びの概観

### （一）航海と日清貿易研究所へ

東亜文化研究所編『東亜同文会史』（財団法人霞山会、昭和六十三年）によれば、向野堅一等を乗せた横浜丸は、九月七日、長崎を通過して西に進み、九月九日の朝に呉淞江に着いた。小汽船に移り黄浦江をさかのぼること一時間余り、上海郵船



碼頭に上陸して日本領事館を訪ねた。時の領事・鶴原定吉は一同を迎えて鄭重な歓迎の挨拶を述べ、それより直ちに英大馬路北、労西路西の億金里の研究所に入った。同所は跑馬場（競馬場）の近くで、泥城橋のかたわらにあった。中国家屋十軒を三棟に改造接続したもので、一棟は学生の寄宿舎にあてられ、階上が自習室、階下が寝室であった。一棟は教室で、第一教室の下が受付と応接室、第二教室の下が学生倶楽部、第三教室の下は柔道場であった。残りの一棟は主として職員の住宅にあてられた。九月二十日、欧州留学の途次上海に寄港した華頂宮博恭王を迎えて盛大な開所式が挙行され、荒尾の訓示を聞いた。その内容は、荒尾精「日清貿易研究所開所式訓示」に収められている。

### （二）日清貿易研究所での学びの概観

日清貿易研究所の教育精神や教育の要旨は、大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学創立八十周年記念誌』（社団法人滬友会、一九八二年）等に所収されている「教育の精神（明治二十三年）」「教育の要旨（同二十三年）」で知ることができる。また、「日清貿易研究所規則要綱　学科程度ノ主旨」では学科内容とその程度が示されている。研究所の修学年限は三年で、その学制と教科は法規によったものではなかったが、独自に「規則要綱」を設け、日本内地の高等教育機関にならっている。第一学年の学科内容と授業予定は「日清貿易研究所生徒第一年学科予定表」の通りであった。

それを見ると、清語学・商業地理・支那商業史・簿記学・和漢文学・作文・商業算・経済学・法律学・習字・商業実習・柔術体操と並んで「英語学」があった。このなかでも、「清語学」「英語学」「柔術体操」はかなり重視されていたことがわかる。教員は、荒尾精（所長）猪飼麻太郎（教頭）草場謹三郎（教員）御幡雅文（清語教員）桂林（清語教員）アストル（英語教員）木下賢良（地理）竹添（教務）、奥田（教務）、浅野（教務）、沈文藻（教務）、田鍋安之助（幹事）宗方小太郎（第一組幹事）小表山秋作（第二組幹事）西村忠四郎（第三組幹事）であったという。『貞治日記』の「時に偶然三池会計掛と列車中で会す」とあるので、会計係は三池という人物であったということがわかる。

さらに、「生徒心得」二十五カ条、「寄宿舎規則」四十四カ条[6]を定めて、厳しく学生の心得と良なれば親愛の情を厚くし他日他国との交通貿易の発達を助けるが、然らざる時は国交を傷つけ延いては本所の面目には勿論吾が邦家の名誉利害に影響するから、清国人は固より各国人に対しては、決して軽薄の動作を為すべからず（要旨）」と戒めている（『東亜同文書院大学史』滬友会、一九五五年、三〇～三十一頁）。

日清貿易研究所生徒第一年学科予定表

| 期限 | 前半季学年 | | | | 後半季学年 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 科目 | 一週時間 | 前期 | 一週時間 | 後期 | 一週時間 | 前期 | 一週時間 | 後期 |
| 清語学 | 十二 | 会話口授 | 十二 | 仝上 | 十二 | 仝上 | 十二 | 仝上 |
| 英語学 | 六 | 綴字読本<br>会話口授 | 六 | 仝上習字 | 六 | 会話<br>習字 | 六 | 会話<br>作文<br>書収 |
| 商業地理 | 三 | 亜細亜ノ部 | 三 | 仝上 | 三 | 支那ノ部 | 三 | 仝上 |
| 支那商業史 | 三 | 太中古ノ部 | 三 | 仝上 | 三 | 中世ノ部 | 三 | 仝上 |
| 簿記学 | 二 | 単式 | 二 | 仝上 | 二 | 仝上 | 二 | 複式 |
| 和漢文学 | 一 | 読書<br>輪講 | 一 | 仝上 | 一 | 仝上 | 一 | 仝上 |
| 作文 | 二 | 通信文<br>記事文 | 二 | 仝上 | 一 | 報告文<br>契約文 | 一 | 仝上 |
| 商業算 | 三 | 和算 | 三 | 仝上 | 二 | 洋算 | 二 | 仝上 |
| 経済学 | | | | | | | 一 | 経済原論<br>貿易論 |
| 法律学 | | | | | | | 一 | 法律原理<br>日本商法 |
| 習字 | 一 | 楷書 | 一 | 仝上 | 一 | 仝上 | 一 | 行書 |
| 商務実習 | | | 三 | 日清両国度量衡使用法、日清貿易品研究 | 六 | 日清貿易品研究日清各種商業ノ組織及営業ノ方法 | 八 | 研究所模形ノ実践、商会ノ実習 |
| 臨時講義 | 一 | 貿易上ノ心得 | 一 | 仝上 | 一 | 仝上 | 一 | 仝上 |
| 柔術<br>体操 | 六 | 古式<br>兵式 | 六 | 仝上 | 六 | 仝上 | 六 | 仝上 |
| 合計 | 四十 | | 四十三 | | 四十四 | | 四十八 | |
| 備考 | 入所後第一年教科書中全体ニ付精細ニ試験ヲ行ヒ若シ其教授程度ヲ過ルモノアルキハ其学科ノ仮卒業証ヲ附与シ余暇ヲ以テ商会及研究所ノ実務見習ニ従事セシメ其他ハ学力ノ優劣ニ依テ三級ニ分ツモノトス第二第三学年亦之ニ倣フ | | | | | | | |

（三）現存する向野堅一の清語学習のための写本

向野堅一は日清貿易研究所で、どのような学習をしたのだろうか。清語の習得に関して向野堅一記念館には堅一による数種の写本が残っている。そのうちの四冊、向野堅一『清語談論篇』・長白桂林先生口述『申報意解』・『清話集録』・句曲王秉元著、御幡先生譯解『貿易指南』については、現在、堀地明氏が分析にあたり、「向野堅一の中国語教本」（『向野堅一顕彰会会報第四号』向野堅一顕彰会、二〇一四年発行、印刷中）として近く刊行される予定である。四書の概要を記すと、

**○向野堅一『清語談論篇』（全三二頁）**：表表紙に「明治二十四年五月一日」と記され、一八九一年五月に成ったもの。裏表紙には「大日本帝国鎮西□□□平群新入村八都」と記されており、向野堅一が上海渡航前に中国語を学んだ時の教材である。

**○長白桂林先生口述『申報意解』（全三二頁）**：裏表紙裏に「明治二十四年日清貿易研究所研究生向野堅一」との記録があり、一八九一年のものと判断できる。

**○『清話集録』（全八五頁）**：序に「讀書百篇義自通　八竜主人」との記載があるが、日時を示す記録は見当たらない。

**○句曲王秉元著、御幡先生譯解『貿易指南』（全七四頁）**：桂林の「光緒辛卯（一八九一年）」序が付されている。



堀地によれば、これらは、「安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書、一九八八年）でも取り上げられておらず、非常に貴重な中国語教材の資料である」という。堀地はまた、「上海に所在する日清貿易研究所で、北方音の清語を学ぶ機会があったことが明確になり、上海の日常生活では使用されない北方音が講じられた要因の一つに、日本人の中国東北地方への経済的進出を念頭においた措置ではなかったか」とも指摘する。特に『貿易指南』は、向野が河北と香月らとともに、日清戦争後、北京公使館用達「筑紫洋行（筑紫弁館）」を東交民巷に設立するときに実用的な清語として活用できた点は、まさに堀地の考察通りであり、この日清貿易研究所で習得した語学力が、堅一の実業家としての活躍する礎となったのである。

## 三、日清貿易研究所における向野堅一―『宗方小太郎日記』『高橋正二日誌第二』と兄たちの書簡を見つめて―

宗方日記を著した宗方小太郎（7）は第一組の幹事であった。学生ではなく職員である。宗方は一八八八年（明治二十一）から日記をつけていた。渡清以降、一八九〇年（明治二十三年）から、一八九三年（明治二十六）七月までの分で向野堅一に関する部分を抽出する。ただしこの日記は現在、上海社会科学院歴史研究所図書室に保存されており、分析対象としては幾つかの難点がある（8）。

高橋日誌を著した高橋正二（9）は第三組に所属する学生である。一八九一年（明治二十四）九月九日から一八九二年（明治二十五）十二月三十一日まで書き綴られている。職員であった宗方の日誌と異なり、学生の立場で書かれたものである。残念ながら一八九二年（明治二十五）九月三十日、渡清したときから記してきた日誌及び「通信□件の一小冊子」を誰かに盗まれたために、『高橋正二日誌 第一』は存在しない。

堅一の兄たち、特に次兄・浦太郎（後の斎）（10）の書簡は下記のとおりである。

①［封筒表書］清国上海英租界大馬路　日清貿易研究所　向野寅吉殿　大至急用（消印　1890.06　□）（※切手切取り箇所有り）
［封筒裏書］大日本帝国福岡縣筑前国鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎拝　第十月廿五日発（消印　SHANGHAI※□
※30・OCT・1890）

②[封筒表書] 清国上海府英租界大馬路日清貿易研究所　向野寅吉殿　至急　親展（消印　SHANGHAI※I.J.W.A.1-1・28 DEC 1890）（消印　NAGASAKI※P.&T.□ 21 DEC 1890）（※切手切取り箇所有り）

[封筒裏書] 大日本帝国筑前国鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎　第十二月十六日投函

③[封筒表書] 清國上海英租界大馬路日清貿易研究所ニテ　向野堅一殿（朱印　書留　R）（朱書　4085 七弐九）（消印　肥前長崎廿四年七月十六日）（消印 NAGASAKI・19・JUL・1891・JAPAN.I.J.P. □ 21・JUL・1891・SHANHAI）

[封筒裏書] 大日本帝国福岡縣鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎　七月十三日発（朱書　七月廿一日着）

④[封筒表書] 清國上海英租界大馬路日清貿易研究所ニテ　向野堅一殿　至急親展（消印　長門赤間関廿四年九月九日ニ便）（消印　SHANGHAI　※J.P.O.　14 SEP 1891）（消印　NAGASAKI※JAPAN 11SEP 1891）（※切手　切取り箇所有り）

[封筒裏書] 大日本福岡縣鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎　第九月六日投函（※向野印有り）

⑤[封筒表書] 清國上海府英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿　至急（朱印　書留）（朱書　弐四五 709）（消印　R NAGASAKI※JAPAN　※7・FEB・1892 'SHANGHAI※R.P.O※ 10・FEB・1892）

[封筒裏書] 大日本帝国福岡縣鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎（消印　肥前長崎廿五年二月七日ロ便）

⑥[封筒表書] 清国上海英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿　大至急親展（消印　NAGASAKI※JAPAN※ 25 ※MEIJI 24 Ⅶ 日本 1892）（※切手切取り箇所有り）

[封筒裏書] 日本福岡縣鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎

⑦[封筒表書] 清國上海英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿　大至急（朱印　書留）（朱書　弐弐参）（シール　R NAGASAKI. JAPAN. No. 6456）（消印　肥前長崎廿五年九月二十七日ハ便、※NAGASAKI　※　JAPAN※ 25　1892）

[封筒裏書] 大日本福岡県鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎（消印　1892）

⑧[封筒表書] 清国上海英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿（朱印　書留）（青ペン 3726　朱筆四三一）（消印　切手切取りにより不明）

[封筒裏書] 日本福岡縣鞍手郡新入村大字上新入　向野浦太郎　（向野印三ヶ所有り）（消印　□I.J.P.O.SHA□ 14 IV 1893）

⑨[封筒表書] 清國上海英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿　平信（消印　肥前長崎廿六年四月十六日ロ便）（消印　NAGASAKI



※JAPAN　※ 26　※MEIJ　I※ 17　Ⅲ日本　1893）（※切手切取り箇所有り）

[封筒裏書] 大日本帝國福岡縣鞍手郡新入村大字上新入二千百四番地　向野浦太郎　封（消印　MEIJI※I.J.P.O※S□ 19 □ 18 □）

⑩[封筒表書] 清國上海英祖界大馬路　日清貿易研究所　向野堅一殿　（朱書　書留）（シール　吉□NAGASAKI.JAPAN.No. 1815）（消印　筑前福岡廿六年□十八日　NAGASAKI・JAPAN・6・MEIJI 22・V・1898）

[封筒裏書] 大日本帝國福岡縣鞍手郡新入村大字上新入　向野浦太郎　（消印　肥前長崎廿六年五月十九日ハ便）

⑪[封筒表書] 清國上海英租界大馬路日清貿易研究所　向野堅一殿　大至急（朱印　書留）（シール R　NAGASAKI.JAPAN. No. 2275）（消印　NAGASAKI・JAPAN・25. VI. 1893）

[封筒裏書] 大日本福岡縣筑前国鞍手郡新入村大字上新八二千百四番地　向野浦太郎

（一）一八九〇年（明治二十三）九月～一八九一年（明治二十四）三月

最初の学期における向野堅一の様子を知る手掛かりとして、浦太郎からの書簡①（明治二十三年十月二十五日付）書簡②（同年十二月十六日付）が残っている。書簡①は、渡清して五十日後のもので、堅一からの初めての手紙に対する返書である。無事を確認できたと同時に、清国の風俗とを知ることができたらしい。堅一が初めて目にする異国の様子を書き綴ったのであろう。実家のほうも何事も無く経過していたようである。「卿常に自愛以て健康を養い勉励以て学事に進之早く錦を着て我日本へ帰省の日に至ることを待つ」というように、弟への期待がうかがえる。注目すべきは「郡役所への嘆願の件」である。嘆願の内容の一部に改名と改印がある。改名はなかなか許可が下りにくいということで、別途嘆願書を提出しても役所から返事がないとのことである。役所から何も返事が無いから、堅一のほうから郵便で郡長に丁重な文章で嘆願書を送れと指示している。何れにしろ許可が出たらすぐ連絡するとのことである。

書簡②の名も「向野寅吉」である。内容は、「今年もあっという間に過ぎ去ってしまったが、さぞや異国の地は寒いであろうから勉学の苦労も察している。寒暖の不順などで病気になることもあるから気をつけよ」という気遣いから始まる。報告としては、「私ならびに本家、その他の親族、年老いた親も元気でいるから心配するな。申し出ていた改名願いに対する許可が出ないので、今度は別の手段で出願したところ、去る十一月二十五日に許可が下りた。堅一と名乗っても差し

支えない」と述べ、続いて「戸籍上も長兄・菊次郎の元へ復籍の手続を済ませ、姓も向野を使用することができる。しかしながら、新聞に広告を出すような場合には、年明けてからにせよ。早すぎると郡長の手前、宜しくない」と述べられている。この書簡によって、一八九〇年（明治二十三）十一月二十五日をもって、向野寅吉は向野堅一となったことが明確になった。ここに記されている「復籍の手続」とは何か。長兄・菊次郎は一八五七年（安政六）九月十二日生れである。堅一とは十一歳の差がある。父・彌作は一八九二年（明治二十五）で七十六歳である。七十六歳が数え年であるならば、彌作は一八一七年（文化十四）の生まれであり、堅一は五十一歳のときの子である。いかなる理由で兄の籍に復籍しているのかは不明である。ここで留意すべきは「新聞に広告を出す」という記述であろう。商業開始の心構えが読み取れる。

別件として、

ある人からお前に問い合わせてみてくれと依頼が来ている。我が国の黒竹また七竹ともいう竹は以前から外国へ輸出されているけれども、田舎者であるがゆえに、大阪、神戸あたりで問屋につけいれられて儲けを損失している者が多い。直接、清国あたりで取引できれば儲けることもできるのではなかろうか。できたらお前がその取引設定に奔走をしてみてくれ。その竹はおよそ三反歩ばかりで、この竹だけが育成するところを見つけているから、輸出品として、新鮮なうちに送りたいのだがどうだろうか。まずは社長あたりに尋ねて、直々答書を送ってくれるように頼んでみてくれないか。

という内容を記している。所長ではなく社長なので、日清貿易研究所に先行して設立された日清貿易会の会長のことを示すのか、その点は定かではないが、兄・浦太郎の認識は、弟（堅一）は貿易すなわち商業のことを勉強している、という認識である。

（二）一八九一年（明治二十四）四月～九月

一八九一年（明治二十四）は、書簡、高橋日誌、宗方日記で照合することができる。まず、書簡③（明治二十四年七月十三日付）の冒頭に「其国騒動の由は兼て新聞紙上に於て承知度居候処卿の書を披見し大に安心仕候」とある。「其国騒動」というのはどのようなことを指すのであろうか。推測として、日清貿易研究所学生による『上海新報』襲撃事件があげられる。

上海で最初に発行された日本語新聞『上海新報』は、長崎出身の松野卯三郎が一九〇〇年（明治二十三）六月五日に週刊紙として創刊した。従業員は十数人でその多くは日本人であった。趣旨には、新聞発行によって日中貿易を発展させるという夢がある、と書いてあり、日本人居留民が上海で展開した経済、あるいは文化事業について多くのニュースを掲載していた。日本人居留民の上海での生活や仕事の便宜を図るため、特に中国事情と商況に関する専門欄を設け、中国の物産の名称と日本語の訳名、中国の習俗、日中英三か国語対照の会話、日中英三か国の貨幣、度量衡の比較表、上海の物価、中国の各港の輸入品原価および税の比較表、上海商況、気象情況、船の出発情報、上海ガイドなども掲載した。ところが、翌年五月二十九日に廃刊となった。廃刊に追い込まれた理由は、経営事情とは異なる日清貿易研究所学生の騒動すなわち襲撃事件によるものであった。

『上海新報』は、上海の日清貿易研究所の動きにも強い関心をもっていて、多くの紙幅を割き、同研究所の学生リストまでも掲載したという。五月十七日、二週連続で同研究所に関する記事を掲載した。そこには、同研究所は陸軍省方面から巨額の補助金をもらっており、軍事スパイを養成するために設立されたと書かれていた。この記事は中国の新聞に転載されて社会的反響を巻き起こした。同研究所はこれに強く反発し、記事の取り消しを要求した。そして五月十七日午後四時ごろに、同研究所の学生三十数名が上海新報社に行き、社長の寝室兼応接室に押し入り、松野に謝罪状を書くよう迫った。その際、一人の学生が短刀を抜き松野を脅し、「謝罪状は勿論、三日以内に廃刊しろ、もしそれができぬとならば、この場で切腹しろ」と迫った。続けて松野を鉄拳が襲い、ついに松野は謝罪状を書くしかなかった。夜七時に日本人巡査が現れ、事態がこれ以上悪化するのを食い止めた、という襲撃事件であった。これが「其国騒動」であると推測する。荒尾精は三十名に退学処分を命じたというのが定説である。

向野堅一は、浦太郎からの書簡からすると「騒動」と関わっていないし、実際に退学させられていないので関係なかったと断言できる。浦太郎は「お前の手紙を読んで大いに安心した」と言っているので、おそらく堅一は故郷への手紙に「私は関わってはいない」と認めたのであろう。「そして、今度、生徒中でも格別の取扱があったので、歎訴の赴は委細承知した」と言っている。書簡①においても「郡役所への嘆願の件」というのがあった。何を願い出ているのか、改名・改印の件以外は不明である。歎訴の一つに、堅一は小遣いの送金を申し出たようで、浦太郎から申出の通り小使金三円だけ送ってやる、という確約を得ている。このとき第二期の学費が金二十二円五十銭であったことがわかる。

この書簡にある「郡費生と区分の義」の意味を考察してみると、その後に「向来大に関係を生じ止むを得ざる義有之候はば　小生より金員送付致すべけれ共　卿此行いは固より難渋辛苦は辞せざる処にて少々向したことなれば可成堪忍を至し勉強致呉度存ずれば通信料其他此の類の事は生より給し遣すに付　必ず決心を動かす事なかるべし」と続く。この文面から推察すると、堅一の願いにより郡費生の申請をしたけれどもうまくいかない場合は、浦太郎が送金するから我慢して決心を変えずに勉強してくれ、と兄が弟を窘めている状況ではあるまいか。そして、高倉寿という人物が『ナショナール直訳』という書籍を返してくれ取りに来ると言っているのでどこにあるのか至急回答してくれ、と最後に書いてある。

また、宗方日記の一八九一年（明治二十四）分から向野堅一に関する部分を抽出すると、

八月二日　風雨。日曜日。午前別府（真吉）君来訪。下午又来訪。夜藤崎（秀）、川野、隈元（武次）、高橋正二、向野（堅一）、内田英治、別府（真吉）、原田（茂俊）、池野、甲斐（靖）等来談。十時帰る。（カッコは本稿執筆者による。以下同）

何を話しに来たのかは明確でない。

一方、この年九月九日から書き始められている高橋日誌を見ると、九月九日は着港の一周年に当るので、内田、向野の二名とともに午後八時より菓子を食べて一周年を祝っている。九月十七日からは、二十八日から始まる定期試業のための自習期間となり諸科休業となった。午後六時より向野、内田英治の二人と暫時散歩する。高橋日誌によれば、長江沿岸の各処で暴動を起こさせた扇動者は清人ではなく西洋人六、七名であり、ダイナマイトや爆裂物及兵器等を蓄えているという情報を得、午後十時頃に日清貿易研究所が所在する大馬路で火事があったという。内田は福岡県早良郡田嶋村の出身で、向野とは仲がよかったようである。一九〇五年（明治三十八）日露戦争に通訳官として従軍し、奉天会戦のとき三十六歳で戦死してまう（東亜同文会編『対支回顧録』下巻、原書房、一九六八年、六三七頁）。亡くなるまで向野堅一に書簡を送り続けている。その内容は心情を綴ったものが多い。

試験期開始前の九月六日に届いた浦太郎の書簡④（明治二十四年九月六日付）には、

過日受け取った手紙は読んだ。益々壮健の由、喜んでいる。宗家もその他の親族に変わったことは無いが、新聞やお前の手紙によれば猛暑というわけではないとのこと、父ともよく相談した結果、帰国は止めて勉強するよう申し伝えよとのことである。左様心得て勉強に専念せよ。日頃、県知事からの通達によれば上海より長崎へ入港した英国船某号がコレラ患者を乗船させていたらしい。幸いに当港（長崎）では船舶取調のときに発見して処置したけれども、その病毒が下ノ関港で蔓延しているらしい。その地はどのような状況なのかは大いに心配するところなので、大丈夫なのか返事をしてくれ。

と書かれている。コレラが鞍手郡にも飛び火した。さらに故郷・新入村での水害状況が甚だしく、書簡④によれば、七月二十六日より連日豪雨で平時より水位が二尺余高く大雨は止まず、大きな洪水となった。人家も皆浸水して人馬にも死傷者が出た。幸い新入村は人命損傷は無く、不幸中の幸であったけれども、田畑等はことごとく被害を受け、堤防破壊は未曾有の惨状となり、新入村の土木費拾万円以上、地租額八万円余となった。差引二万余りの多額に及び、「驚愕の至りに候」という状況だったのである。

浦太郎は自己の心情を綴りながら

来年の今頃は人々もすこぶる困難な状況になるだろうと思いながら視察している。人の気持ちも荒んでおり、盗賊、押込、強盗の類が多く、殺害や誘拐が起こっている。どこの村も警備を厳重にしている。青年たちの間では柔術、撃剣が流行しているが、お前たちも運動のため、その学校には柔術の授業あるというから、務めて鍛練していつでも役立てるようにしておきなさい。もし、お国のお役に立とうというときがあればそれは生死を分かつときであろうから、平生、心を込めて専念しなさい。

と忠告している。「その学校」とは「日清貿易研究所」を指し、前出の「日清貿易研究所生徒第一年学科予定表」を見ると、「清語」「英語」の次に「柔術・体操」の時間数が多い。

一方、堅一の方はどのように過ごしていたかというと、高橋日誌の九月二十九日の記述では、この日は曇時々降雨であった。試験期間中にもかかわらず、昼食後に向野、内田英治と三人で郵船会社碼頭まで散歩する。雨降りのなか、何を思って碼頭まで散歩に出かけたのだろうか。

同日誌には十月一日に「昨日を以て定期試業結了せしを以て本日より来る六日迄諸科休業」とあるので、ここで試験期間や休業期間をまとめると、九月十七日～二十七日までの十日間は休み、二十八日～三十日まで学期試業である。十月一日～六日まで休業である。試験が終わって休業期間に入るとベースボールをしたり、花園を散歩したりして過ごしている。十月七日から学業期間開始。十月二十日、第二学期試験成績表が掲示された。高橋正二の席次は七位である。七位の成績は「算術八十、作文六十三、簿記九十三、英会話九十三、英訳六十、英作六十五、英書九十四、英読一〇〇、英文八十八

清抄九十五、清訳七十九、清暗八十八、英平均一六六、清平均一七四、臨時試業八三、合計六五九、平均八二」となっている。二十七日の午後三時半より学期試業優等者に賞品及賞状が授与された。第一組では、高橋正二および向野堅一を含む十五名が表彰された。第二組では七名、第三組では四名が表彰された。一組に優秀者が集まっているようである。表彰された日の夜、向野と河北純三郎とで味花園に行っている。

（二）一八九一年（明治二十四）十月～一八九二年（明治二十五）三月

宗方日記には、

十月十一日　陰天。終日在家。午前伊地知（季綱）来訪。荒尾（精）に代はりて文一篇を作る。下午猪田（正吉）来訪。夜右田（亀雄）、別府（真吉）、小野、伊地知、郡島（忠次郎）、向野（堅一）、澤本（良臣）、中原毛助来談。

と記述されている。交遊関係の一端を知ることはできるものの、来談の内容等について知ることはできない。

高橋日誌によると、十一月四日から諸科臨時休業になった。向野は、十一月五日の旧暦仲秋節の午後八時から送別会を開いてもらって、十一月八日土曜日の午前に横浜丸で井澤修二とともに帰省した。高橋たちはこれを見送っている。そして、十一月二十三日新嘗祭の日、午後四時に西京丸で堅一は戻ってきた。高橋は出迎えに碼頭に赴き、その夜、堅一の帰所の祝宴を開いた。帰省期間は移動日を含めて十六日間であった。

戻ってきてからは仲間たちと登山にも行っている。たとえば十二月二十四日の土曜日晴れの日、午前十時より西村（忠四郎）、青木喬、内田英治、向野、猪田正吉、岡部（喜三郎）の六名と鳳凰山に向った。午後五時頃に山麓から十町ばかりの場所にある小廟に到着してそこに一泊した。寝ようにも寝具もなくて、わずかな藁を探してきてこれを布団代わりに午後六時頃から眠りに着いた。あまりの寒さに安眠することはできなかった。午前二時頃になって火を焚いて暖を取った。十二月二十五日の日曜日、この日も晴れていた。午前五時に廟を出て未明に鳳凰山に到着した。暫時、山で休憩しつつ日出の後に竹を切り、午前十時から帰途に就いた。十二時頃には泗経で麺を食べて午後七時に学校に戻ってきた。このとき猪田が足を痛めたので二時間余を休息時間に費した。このように、あるときは山登りをして実践的に体を鍛えていることがわかる。十二月二十六日から冬期休業に入り、この日の午後、室長改選が行われている。十二月二十八日からは年末休業となった。休業に入る前の十二月十三日の夜、堅一は、末廣、右田、牧（相愛）、清田、岡田晋、川野久（河野久太郎カ）、



中原らと宗方のところへ来談している。

明けて一八九二年（明治二十五）、高橋日誌には向野は登場しない。二月一日は上海新年の景気視察のため諸科休業となった。このころ兄たちから一通の書簡⑤（明治二十五年一月五日付）が堅一に届いている。まず、堅一から来た「客月二十九日」の手紙によって、元気で過ごしていることを喜び、昨年の洪水が直方新入にもたらした経済的事情を語っている。二十円五十銭を日清貿易研究所の事務所に送り、四円はお前の小使銭として渡すとも述べられている。注目すべきは、「春陽の赴きなれば又旧冬の如くは無之人心も甘き候間　決して株等の策は心に配せず必ず勉強致呉」、これが「小生の切に祈る処」という部分である。「株等の策」というのは何であろうか。一八七八年（明治十一）に株式取引所条例が制定され、企業勃興の始まる一八八〇年（明治十三）代末から鉄道株を中心に株式取引が盛んになった。取引所は会員組織と株式会社組織の二つ、有価証券取引所（普通株式取引所）と物産取引所（米穀のみの取引する米穀取引所、その他の物産の取引をする商品取引所）の二つがあり、直取引、延取引、定期取引の三種の取引方法があった。現物の株式は場外市場で売買された。こういった株売買は筑豊地方にも定着して堅一たちにとって身近なものであったことがわかる。

次兄・浦太郎が「決して株等の策は心に配せず必ず勉強致呉」と強く戒めるのに対し、長兄・菊次郎の手紙はいささか落ち着いた文面である。「春になったが益々壮健でよろばしい。父、家の者、親類は皆無事である。心配するな。暖かくなるに従い病気が流行するから健康第一に勉強するよう伝えてくれと父が言っている。決して血気に任せて身体を害することの無いように頭に刻み込んでおけ。家の事については案ずるな。何事も弟浦太郎と相談して解決している。この頃は農業に力を入れ、商業からはさらに手を引いている。このことをあわせて報告しておく」といった内容である。「此の頃は農業を勉務し商業は更に廃し居候」という菊次郎の言葉は、先の大洪水によって農業従事に没頭している状況を想起させる。この洪水で新入一帯の土地を所有していた向野家も大きな損害を受けたと考えられるからである。

高橋日誌によると、三月三日は暖室炉が取り払われて、十日より学期試業につき午後から諸科休業となり、三月十五日で試験期間が終了し、十八日までまた諸科休業である。試験の一週間前が自習で、試験後三日間程度休みとなっている。三月十六日に室長改選を行われた。休業中に改選が行われるのが慣例のようである。十日から始まる学期試験の前に、堅一たちは所長・荒尾を交えて激論したことが宗方日記でわかる。

三月六日　陰天、冷。午前別府（真吉）君来る。下午益田、井深（彦三郎）と晩餐す。益田と散歩楽善堂に至り、小談帰る。郡島（忠次郎）、楠内（友次郎）、大川愛次郎、向野、甲斐（靖）等来談。所長招くにより至る。我党今後の方針に付き、興亜会様の者を設立する事に付き、時勢の緩急により大に意見を異にし激論三時間に亘り袂を□（ママ）て帰る。十時別府（真吉）君来り、十二時帰る。

とあり、日清貿易研究所の学生たちは「興亜会」について大いに意見を異にして激論三時間にも及んだという。参加者は荒尾精と荒尾に招かれた郡島忠次郎、宗方小太郎、楠内友次郎、大川愛次郎、向野堅一、甲斐靖である。『東亜同文会史』（前出）によれば、「興亜会」というのは、後に亜細亜協会と改称、さらに一九〇〇年（明治三十三）には東亜同文会に合流した組織である。会長には、子爵・長岡護美（肥後藩主細川氏の一族）、副会長には渡辺洪基（全権公使・学習院長・帝大総長）が選出され、会員には旧佐賀藩主侯爵・鍋島直大、初代北京公使伯爵・柳原前光、漢学者・重野安繹らが名を連ね、一八八一年（明治十四）には御下賜金が下賜されている。興亜会の主な事業は「支那語学校」の経営で、東京の芝愛宕下天徳寺の同校では一時百余名の学生を収容していた。一八八二年（明治十五）、文部省直轄の外国語学校に合併されたが、生徒のなかからは宮島誠一郎の息子・宮島大八（のちに中国語学校の善隣書院を創設、書の大家）をはじめ、小田切萬寿之助（上海総領事）、田辺熊三郎、豊島捨松、足立忠八その他、外交界・財界で活躍した人材を輩出する。

（三）一八九二年（明治二十五）四月～九月

高橋日誌によると、四月二十八日も午後は諸科休業。教頭・猪飼麻二郎が所長代理兼務を委嘱され、根津一が評議員となった。午後七時半から所長・荒尾が上海を離れることへの離別会が開かれ、荒尾が告別の辞を述べ、学生の演説等もあった。余興として剣舞を催して散会した。四月二十九日も諸科休業で午前十時より所長見送りのため郵船会社碼頭に至った。ちょうどこのとき全権公使・青木周蔵が赴任途中で当港に来た。

六月二十日からは臨時休業始まり、同月末には臨時試験が行われている。その臨時試験が終了した後、浦太郎は書簡⑥（明治二十五年七月二十一日付）を送っている。内容は概ねア～エである。

ア　本日（七月）十六日付で発送した書簡は来着したけれども、私が十三日付で学資金と一日に送った書面は到着したのか否か尋ねたい。

イ　お前より申し送ってきた帰省の件については、父上に話したところ、何分本年は金の融通が利かないので、今回は見合せてもらいたいとのことである。

ウ　今回お前を帰省させて一目合わせておきたいという考えもある。しかし父にとって一番気がかりなのは、このたび帰省したことによって来季の学期末試験の成績が悪くなってしまうのではないか。そのようなことになっては長年にわたる苦労も泡となってしまう。万が一を考え、帰省は止めておくほうがよいとのことである。

エ　ただし、あまりにも暑いようであるならば十日間ぐらいは学校（日清貿易研究所）が「暑引を為す」こともあるだろう。もしあればその期間に帰省できるとよいと思う。帰省に関する船賃、旅費、宿泊料などそれぞれ細かな予算（経費）を報告せよ。このたびは土産等はいらない。実費については折返し報告せよ。一日に送金する。到着したらすぐに帰省せよ。

アからは、まめに堅一が連絡していない様子がうかがえる。イからは、堅一が帰省したがっているにもかかわらず、金の融通が利かないということで、父親の言い分として断っている。これは父親の考えではなく兄弟の考えであろう。金の融通が利かないというのも先の災害による余裕のなさが響いているのかもしれない。ウによれば、帰省よりも次回の学期末試験の成績のことが大切だという意識が高い。エで、帰省に関する経費報告の要求や土産の不要を言っていることから、経費節約の傾向をうかがわせる。父親・彌作は「七十六歳」であり、かなりの老体である。それでも、このたび帰省したことによって「来季」の試験が不利なってしまうことが心配だ、と念を押している。この書簡によると、日清貿易研究所事務所から試験の成績表と報告書が届けられていることもわかる。その成績表と報告から「追々卒業の期が近きことなれば一刻千金の時節」と述べられていることから、卒業が確約されている成績であったと考えられる。このように、その学業振りを心配しつつ、また異国の地にありながら年老いた親のことを心配する堅一に、あくまでも学業に専念することを戒めている。

ちょうどそのころの七月十六日の宗方日記では

七月十六日　晴天。土曜日。朝別府（真吉）君来訪二次。所員一同根津（一）氏に中餐す。西村（忠四郎）氏に晩餐し共に出て味菰園に散歩す。夜別府（真吉）、楠内（友次郎）、向野、本島（正礼）、右田（亀雄）、川村（景敏）等来談。

とある。この日の夜に六名が宗方のところへやって来て談話している。宗方は第一組の幹事だったので、第一組の学生とよく来談したのであろう。八月五日の宗方の記述では、

八月五日　雨天。早朝出て古庄弘を乍浦路に訪ひ小談、別を告て帰る。井口（忠次郎）、野中（右一）等来談。別府（真吉）来り蘇州行きを誘ふ。晩食後小浜と出て船行に至り、蘇州行の船を定む。来回四天滞在二天にて六円四十銭とす。飯料一頓三十文。薄暮帰る。

野中（右一）、楠内（友次郎）、向野、井口（忠次郎）、大熊（鵬）等来り、常熟旅行の事を商量す。大西（蓬莱）、吉原（洋三郎）等来り、鎮江旅行を誘ふ。

とあり、蘇州行の船で四日間の訪問および二日間の滞在費用を六円四十銭、飯料一頓三十文と推量し、野中右一、楠内友次郎、向野堅一、井口忠次郎、大熊鵬らと常熟（江蘇省蘇州市）旅行のことを相談している。

高橋日誌によれば、臨時試験の成績は七月二十四日に発表された。ちなみに高橋の成績は「席次四　作文八十五　簿記一〇〇　算術一〇〇　経済九十五　物品九十五　清抄九十八　清暗八十五　英訳九十八　英読一〇〇　英書一〇〇　英文八十六　英会九十六　英作九十八　合計一二三九　平均九十五」である。「予より上席は皆平均九十六とす」とある。この試験での表彰はとりわけ行われなかったようである。八月一日から十日まで暑中休業。八月十六日から二十日まで暑中休業が延期。九月十四日は試験準備のため諸科休業。九月二十六、二十七日は試験慰労として諸科休業。この日から起床時刻が午前六時に改正された。

試験慰労の諸科休業中、浦太郎が書簡⑦（明治二十五年九月二十六日付）を認めている。その内容は左記の通り。

陰暦七月十五日（新暦九月五日）晩に原田茂俊（原文では原田茂敏）氏から清国の情況などは聴いた。彼が再び渡清するときには父の写真を託すつもりだった。これまでは父上も元気だったが先月初めの頃より体調が悪く少々顔色すぐれない。さして病気というわけではないが何となく鬱然している。もはや七十余歳の老体なれば実に風前の燈火に同じでいつどうなるかわからない。自ら余命いくばくもないのを感じているらしい。お前を帰省させてほしいらしく兄弟で相談の上、帰省してもらうことになった。

原田茂俊という人物は同期生である。堅一の実家に立ち寄ったらしい。結局は、書簡⑥における兄弟たちの指示に従って堅一は試験前には帰省しなかったらしい。しかし打って変わって、今回の書簡の⑦では「兄弟相話の上帰省致事に候次第可宜と存候　因て十四円送付候条旅費予算の外は土産を買求むべし」という。どうやら父親の状態が悪化したようである。十四円の送金は多額である。所費以外の金で土産を買ってこい、という指示は父親を喜ばせる意図があったのかもしれない。



高橋日誌よると、十二月十日午後、九月末に実施された学期末試験成績が掲示された。十二月十六日午前零時三十分より賞品及賞状授与式が執行された。第一組は大西蓬純、吉原洋三郎、角田隆次郎（隆平カ）、三澤信一、池橋、高橋正二の六名、第二組は堺与三吉、青木喬、渡部の三名、第三組は小樞、金島（金嶋文四郎）、冨永又吉、平野（六郎）の四名であった。この中に向野堅一の名前は無い。十二月二十六日より冬期休業に入った。

（四）一八九二年（明治二十五）十月～一八九三年（明治二十六）六月

一八九三年（明治二十六年）以降は、宗方日記によって卒業までの様子がわかる。一月十三日　雪であった。宗方は朝方楽善堂に行き、銀五十元を受取った。下午、藤崎秀、井口忠次郎、橋口、白岩龍平、市川徹弥、香月梅外、堺与三吉、小山平二郎、岩崎博隆、猪田正吉、岡田晋太郎、和田央円、渡辺正雄、川本、岡田兼次郎、森川省三郎、森永卯八郎、深水十八、倉島が来談。夜は根津一による離宴に出席。向野堅一を含む所員一同が参加した[11]。この宗方日記の記述では、堅一は一八一九三年（明治二十六）の正月は上海に留まっていたことになる。六月に全科課程を卒業し、卒業式が七月に上海の張園において盛大に行われるまで帰国はしていない。卒業式のときの写真に堅一は写っている。この年、故郷からの書簡⑧（明治二十六年三月一日付）、書簡⑨（同年四月一三日付）、書簡⑩（同年五月十七日付）、書簡⑪（同年六月二十六日付）と、月に一通は着信している。

書簡⑧（明治二十六年三月一日付）は、都合により送金を引き延ばすが、「例の如く二十二円五十銭丈けは早速会計元へ納付」して、残り二円は石摺[12]代である、残金は速に送り返せ、「所長宛の一封は状袋に入れ差出有之候度依頼候也」といった内容のものである。荒尾宛に何か書き送ったらしい。

書簡⑨（同年四月一三日付）は主にA～Eである。

A　老父も暖かくなるのに従って元気でいる。墨と石摺は届いた。

B　多忙のために納入を延滞したら今回は督促状が来た。

C　米の価格が高値なので私は策略をもって金百円ばかり受取ることができたから他人よりはましだ。

D　本年は収入役に転職した。お前が卒業する日を待ち望んでいる。お前が自立して生計を営むようになれば経費が掛からなくなる。

E　さらに職によっては勧業に従事しやすくなる。（私は）一世一代この職（収入役）で老いる覚悟だ。お前も精々勉強して国に帰ってき

てくれ。

E　本年は亡母の石碑を建立する。最早石工へ注文している（石はみかげにて）。代金は二十二円で、彫刻すべき字を名家に頼んで支払うつもりである。しかし有能な書家がいないから、清国に有能な書家がいて頼めるものなら頼んでみてくれ。至急を要する。

Aの記述からすると、書簡⑦（明治二十五年九月二十六日付）の帰省要請に従って一八九一年（明治二十五）十二月二十六日からの冬期休業中に帰省し、一八九二年（明治二十六）の正月は故郷・新入で過ごした可能性が高い。また書簡⑧（明治二十六年三月一日付）の石摺代送金に応えて端渓の石摺と墨を郵送した。Bによって、日清貿易研究所の学費請求が学生本人ではなく、父兄に直接来ていたことがわかる。Cによって、堅一に仕送りしていた次兄・浦太郎に多額な収入が得られたこと、Dによって、浦太郎が新入村の収入役に就任し、弟・堅一の帰国を待ち望んでおり、何か実業を起こさせようと考えていることがうかがえる。Eについては、確かに向野堅一の母の墓石は御影石でできている。結局、墓石の文字は清国の書家ではなく、咸宜園出身の文人・吉嗣拝山が書いた。

書簡⑩（同年五月十七日付）では、「三月十八日付で出状が来着した。老父、家内一同無事。今度の支払いで学費金も結了。お前が望む進路については勉強した結果が報いられることを祈る。例のごとく学資金二十二円五十銭と筆料として二円は送付したから、会計へ納付の上、受領書を発送してもらえ」といった旨が述べられた後に、向野家氏神の剣神社の鳥居建立のことを知らせている。鳥居の何を堅一に頼んでいるのかは不明であるが、「宗像雲閣にでも依頼可致候」とある。この段階では亡母墓碑の碑名を書いてくれる書家もまだ見つかっていないらしく、「宜敷書家を篤と求め出して依頼致呉候」とある。

日清貿易所学生として最後に受け取った書簡⑪（同年六月二十六日付）は、浦太郎が雨降りしきる北部九州の梅雨時期に認めたものである。壮健の様子を喜びつつ、以前出してくれた葉書が来着したことと、金六円が返付されたので受取ってもらいたいという旨を伝えている。

この書簡では、卒業後の帰国を促している。理由は父親の老衰にある。

父はすでに古希を過ぎ、今は壮健のようであるが二、三年前の挙動を回顧すれば、言語の衰弱に加え、あたかも風前の灯火ようで、「一朝病痾に罹るの日」があれば、もう老顔を拝するの日は無いと覚悟しなければならない。父上もまたお前のこのたびの帰朝を日々指折り数えて待っている。「研究所よりの来翰に由りて承及候得共実地如何なる模様なるや否の真に付大に御配慮候致居候条」今回は一応帰省し、父を安心させてくれ。そして再び清国に渡海すればよいじゃないか。急ぎ回答せよ。

とある。ここで注目すべきは傍線部の記述で、卒業に向けていよいよ上海商品陳列所での実地準備に入ったことを感知できる。この手紙には、加えて「筆少し買求め且つ筆立てあらば一滴求め帰り有之度候也」とある。向野堅一記念館には、清国製の白磁の筆立てが残っている。堅一が兄の求めに応じて帰国したことの証である。堅一の卒業を楽しみにしていた父・彌作はこの年の十二月二十九日に死亡した。堅一は死に目には会えなかった。

## おわりに

日清貿易研究所は、マラリアに悩まされ、経営難にさらされ、前途多難な学校であった。向野堅一の学生生活をみると、学業だけでなく、ときには友人と散策や登山や野球をしている。またときには激しく議論し、職員や友人の見送りや宴会にも参加して交遊を深めている。上海という異国の地においての学生生活も国内の学生生活と大差ないようにみえる。日清貿易研究所の学生らは、決められた教育課程に従って、授業を受け、試験を受けた。学業成績書および報告書は保護者に送付された。学生たちは、様々な援助を受けつつ、叱咤激励されて異国の地での勉学に励んでいたと推測される。その勉学内容は、上海の日常生活では使用されない北方音の清語であり、中国大陸の東北地方への経済的進出を念頭においたともいえる、実用的な清語と商業知識の習得であり、首都・北京事情に精通した内容でもあった。まさに対清貿易に携わる人材養成を目的とした内容だったのである。

また、こうした学習内容を習得する学生たちの関心の背後には、「興亜論」といったアジア主義的な思想があり、アジアへの雄飛を志向していたと考えられる。一方、経済面を支えた家庭の状況はどのようであったろうか。日清貿易研究所に学ぶ学生たちの家庭の事情は様々であったであろう。特に西南の役以降没落した九州士族の子弟や、藩に貸し倒れした掛屋の子弟、収穫が安定していない農業従事者の子弟などは、一学期間二十二円五十銭という高額な学費を容易に都合できたとは考えにくい。それでもあえて留学させた父兄たちは、独立して勧業に就くことのできる職能の育成、卒業後に国内外での実業に雄飛することを期待し監ていたからである。そうした一端を向野堅一の父兄たちの書簡はよく示している

と考える。

## 註

(1) 日清貿易研究所研究論は概ね二極化されており、近年出版された藤田佳久『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』（ナカニシヤ出版、二〇一一年）などは日清貿易研究所をビジネススクールと位置付けている。一方、翟新『東亜同文会と中国』（慶応義塾大学出版会、二〇〇二年）などは、「欧州各国に先んじて中国を制圧するための政策構想として」設立された学校と位置付ける。遡って渉猟していくと、坪内隆彦「日本文明の先駆者・荒尾精」『月刊日本』十二巻五号（K&Kプレス、二〇〇八年、七四～八一頁）は、荒尾精の立場で書かれたもの。小崎昌業「東亜同文会・東亜同文書院大学の今日的意義―霞山会・愛知大学への伝統継承と発展（特集 東亜同文書院研究）」『大倉山論集』第五十一巻（二〇〇五年、一九～六〇頁）は、東亜同文書院の前身として書かれた論。村上勝彦「産業革命初期の日中貿易―日清貿易研究所に関連して」『東京経大学会誌』一七四号（一九九二年、六三～九五頁）は、日清貿易研究所を明治初期に対清貿易を試みた学校創立例として取り上げた論で経済的動向とともに分析しようとしたもの。佐々博雄「日清貿易商店構想と日清貿易研究所」『多賀秋五郎博士喜寿記念論文集アジアの教育と文化』（巌南堂書店、一九八九年）は、荒尾精とその一連の活動家が対清貿易にどのような構想をもっていたかをまとめたもの。小林一美「明治期日本参謀本部の対外諜報活動」（『探究』、一九八六年）鐘鶴鳴『日本侵華之間諜史』（華中図書公司、一九三八年）は、日清貿易研究所所員たちが意図して中国（清国）侵略のための諜報活動を行っていたことを論じたもの。黄福慶「甲午戦前日本在華的諜報機構」（台湾近代研究所編『近代史研究所集刊』第十三期、一九八四年）は、日清戦争における日清貿易研究所員らによる諜報活動論。野間清「日清貿易研究所の性格とその業績―わが国の組織的な中国問題研究の第一歩」（『歴史評論』一六七号、一九六四年、六八～七七頁）は日清貿易研究所に焦点を当てた中国研究材料論。

(2) 卒業人員については『東亜同文書院大学史』（滬友会、一九五五年、九～十五頁）によれば八十九名となっている。松岡恭一・山口昇編『沿革史』（東亜同文書院学友会、明治四十一年、二十三頁）では七十七名となっており、その付録の出身者名簿には八十六名の名前が記載されている。しかし、西島良爾、中西重太郎は途中退学であることなどの例から考えても実員は不明である。ただ、白岩龍平のように後に卒業を認められた例もある。上海張園での記念写真には八十七名が写っており、そのうち学生数は六十八名である。よって、本稿の小浜、橋口、川本、速水、原、三池、小野、大隈、高柳、志良川、大西禹、中田、日高、池橋、大木、園部、池田、松金、横田らの氏名については確認できなかった。

(3) 読売新聞 一八九五年（明治二十八）一月十日朝刊二面に「通譯官向野堅一氏」
通譯官向野健一氏は筑前鞍手郡新入の者にして夙に新入明善義塾なる泰巖先生の門に遊び経書歴史と修め明治十八年笈を負ふて福岡に出で普通學と修め後ち縣立修猷館に入學し業将に卒んとなるや病氣の襲ふ所となり遂に退學す 先是荒尾精氏日清貿易研究所を清国上海に設立なるの計畫ありて各地を巡回し偶々福岡に来たり 有志を集めて一場の演舌あるに逢ふ 氏之れを聞き以嶌らく日本の富国強兵は後来商業の発達に在りと 此に於て大いに日清貿易の振はざるを慨歎し此期に乗じ渡清以て邦家の為に盡くす所あらんとし直ちに願書と出して去る 然り而して其の入學試験の期に至るや病未だ癒えず五ヵ月の久しきに渉る 幸にして試験二ヶ月の延期となりしかば氏大に悦び是より専心療養怠らず明治廿三年六月病全く癒へずと雖ども漸くに歩行することを得る 時拾も東京に於て試験施行の報あり 氏乃ち陰かに病と侵して上京應試し及第したりと雖ども如何せん身体病後にして壮健為らず 在京十数日にして帰郷し保養以て渡清の期と待つ 同年九月一日郷里と発し渡清の途に上る 九月九日清國上海に着し爾後研究所に在りて清語、英語、地誌、商品研究に力を盡し明治廿六年七月卒業し商品陳列所に移つり現地商業を修む（後略）

(4) 荒尾がどのような演説をしたかは、すでに多くの機関で配信されており、『日清貿易研究所設置演説筆記』（井深仲郷記）等で確認できる。日清貿易研究所の生徒募集をめぐって、江島は荒尾精の活動について「博多の青年に如何なる須読の必要がある」と問い、その根拠を全面的な歴史の引用で示した。すなわち、「博多は古昔より九州咽喉の要港であり、古く遣唐使、最澄、空海らも博多から渡航し、近くは島井宗室、神屋宗湛、大賀宗九父子らの豪邁の人物が我博多に崛起して、重に外商に従事しつつありたことは世に知れ渉り、近世の鎖国後も、豪邁有為の博多人種として、南洋諸島、シャム、阿媽港、朝鮮などに密商を営んだが、寛文七年に伊藤小左衛門の一累が鎖国の禁を破った廉で処刑されたことは、博多商業を消耗せしめし劇薬であった、今日、荒尾による日清貿易の唱道は、その意味で著しき博多商業の沿となるので。ここに博多青年の須読の必要がある」等々といった要旨である。（大宰府市史編集委員会「古都大宰府の展開」『大宰府市史別編』、太宰府市、平成十六年、参照）